



こんな時
こんな本

大切な人が最期を迎える時は、「隣に寄り添っていたい」と思うのが人情です。その瞬間がたとえ長い長い介護の末に訪れたとしても、私たちは相手に注いでもらった愛に感謝しながら、笑顔で看取ることができればいいでしょう。

リプロ池袋本店
矢部潤子さんに聞く

看取りの時

「満足死」の準備、淡々と

矢部さんいわく、「近年、書店に『エンディング』とも呼べるようなジャンルが出現している」という。

多くが人生の終え方、大切な人の看取り方に関する本で、以前なら「冠婚葬祭」や「医療・介護」に分類された。記者は絵本①「ぶたばあちゃん」を職場で読み、「これ以上、幸福な看取り方、看取られ方があるだろうか」と、人目もはばからず涙した。主人公のぶたばあちゃんは、自らの死期を悟ると、銀行で預金をおろし、たった一人の家族である孫娘に託すなど、意外と現実的な行動をとる。「淡々と死への準備をすすめていく、その姿が切な

い」と矢部さん。②「平穏死」10の条件」は、当人も家族も満足した形で看取りの姿を

平穏死
10の条件

② 長尾和宏著、2012年
ブックマン社、1440円

③ 荒俣宏監修、2000年
角川文庫、7200円

④ モブ・ノリオ著、2004年
文春文庫、463円

← 記者のお薦め



① マーガレット・ワイルド文、ロン・ブルックス絵、1995年(あすなろ書房、税込1620円)



・8011 朝日新聞be「再読」係へ。22日消印まで有効。発送をもって発表といたします。ブック・アサヒ・コム(<http://book.asahi.com/saidoku/>)から購入できます。

本をプレゼント

◆ 紹介した本を各1冊、計4人に差し上げます。住所・氏名と書名を記し、はがきで〒104

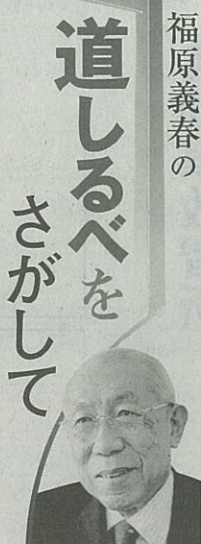
追い求めてきた医師の回想録だ。患者や家族に「どこでどんな最期を迎えるか」のプランがなく、医師任せの人が少なくない現状を、筆者は「死の外注化」と嘆く。病院任せにしていたら体験できなかっただろう「満足死」も多くの例示される。肺気腫と誤嚥性肺炎の70代の患者は、家に帰って食べたいものを好きなだけ食べることを希望。結果、肺炎を再発させ、退院4日目で世を去った。どんな制度や法律、医師や団体を知っておけば「満足死」に近づけるのか、ノウハウが満載だ。矢部さんも「当事者の立場に寄り添った、頼りになる実用書」と評価する。

③「知識人99人の死に方」は、戦後の文化人たちの多種多様な最期を紹介した本。矢部さんが特に衝撃を受けたのは、46歳の時、乳がんで世界したジャーナリスト、千葉敦子(1940〜87)の死だという。米ニューヨークに移住し、身辺の世話は友人がボランティア活動で支えていた。生涯独身で、肉親に頼ることもなく、主治医に帰国を勧められた時も、「絶対に日本へは帰りません」と突っぱねた。

記者のお薦めは④「介護入門」。主人公の「俺」は、自称「個人的な音楽家」の無職。親の会社を辞めてニューヨークに旅立ったが、祖母が転んで頭蓋骨折し、危篤状態との知らせを受け、日本に戻る。「飛行機ごと海に墜ちろと心底願」いながら。

祖母は奇跡的に意識を取り戻し、「俺」の自宅介護を受ける。おかゆを祖母の口元に運び、深夜に祖母のおむつを取り換える中で、「俺」は自分で自分を誇れるようになり、生きている感覚を得ていく。そして「次の目覚めが祖母の死体と添い寝する俺の朝で始まりぬこと」を祈るまでになる。

挑発的なラップの歌詞を走り書きしたように、「俺」の独白が延々と続く。自らが介護者になった時の「バイブル」にしたい。(寺下真理加)



道しるべを
さがして

「ミュージアムが社会を変え」と題して2月に開いた第6回「21世紀ミュージアム・サミット」(かながわ国際交流財団主催)には、フランスからジャック・ラング氏をお招きし、基調講演をしてもらった。

1939年生まれのラング氏は、20代で、後に「ナンシ国際演劇祭」として世界的に有名になるフェスティバルを創設。国立シヤイヨ宮劇場の総支配人などを経て、80年代にはミッテラン大統領

「ミュージアムが社会を変え」と題して2月に開いた第6回「21世紀ミュージアム・サミット」(かながわ国際交流財団主催)には、フランスからジャック・ラング氏をお招きし、基調講演をしてもらった。

文化は100倍返し

文化を重視したミッテラン氏は、81年に大統領に就任すると文化予算の増額を表明。その政策の中で、美術館のあるルーブル宮を大改修する「グラン・ルーブル計画」が動きだした。だが、計画は、いくつもの困難に直面したという。建築家にアメリカのイオ・ミン・ペイ氏を起用したことでは、外国人であることに反感を持つ人がいたうえ、彼が考えた「ガラスのピラミッド」が批判的となった。「攻撃を受けて立つ切り札は、『絶対的な確信を持ち、諦めない覚悟』だった」とラング氏は言っていた。

使うためには、建物の中にある財務省に出て行ってもらうのも大仕事だった。猛反対にあい、「難攻不落」とさえいわれた財務省を、長い闘いの末に移転させることに成功した。建物だけでなく、学芸員ら美術館を支える人のあり方などソフト面の改革も進めた。こうした改革を経て、ルーブルを訪れる人は、81年の250万人から2009年には850万人に増えたという。結びにラング氏はこう強調した。「確かにたくさんお金がかかった。しかし、美を身近に感じる喜び、新しいルーブルを見に行く幸福感は得難い。お金に代えられない価値があるうえ、観光資源にもなる。文化への投資は何百倍にもなって返ってくるのです」。私もまったく同感だ。日本でもそう考える人が広がって、日本を何度も訪れているラング氏だが、今回は特別な体験をした。「ミュージアム・サミット」があった2月8、9日は、首都圏に2年ぶりの大雪が降った日だった。会場は神奈川県の施設は雪に閉ざされ、一時は停電になった。知自家のラング氏も初めて目の当たりにする光景。「日本文化の重要な要素である自然の力を、この雪から改めて学んだ」と話してくれた。(資生堂名誉会長)



聴くなら

エアロスミス
「ミス・ア・シング」

エアロスミスの本業はハードロックだが、ボーカルのスティーブ・タイラーは、切々と歌いあげる演歌的・オペラ的なバラードも得意だ。この曲はダイアン・ウォーレン

という女性ソングライターが作詞作曲で、スティーブの娘リブ・タイラーが出演した1998年のSF映画「アルマゲドン」の主題歌となった。映画では、小惑星衝突による地球滅亡という危機は、リブの父親による自己犠牲で回避される。ミュージックビデオでは、ラストシーンで熱唱するスティーブを映したテレビモニターの映像が途絶える。砂嵐になった画面に娘のリブが手をついてうなだれ、映画とは違うもう一つの「父の死」を示唆する。

歌詞の方も、恋人同士の愛、親子の愛、両方の解釈ができなくもない。「眠りたくない。あなたを何一つ見逃したくない」「ただあなたを抱きしめ、互いの鼓動を近づけ、残りの時間の全てをかけて、この場所この瞬間にとどまっていたいだけ」。ソニーミュージック、1620円。(秘)